

第 12 回 菊川水系流域委員会

議事要旨

日時：令和 4 年 9 月 14 日（水）10:00～11:30

場所：WEB 会議

1. 開会
2. 挨拶（所長・委員長）
3. 議事

(1) 菊川水系流域委員会規約改定について

- 規約（案）は了承された。

(2) 菊川水系河川整備計画の進捗状況

- ・ p2 洪水浸水想定区域面積は L1 か。L1 の場合、L2 の洪水浸水想定面積はどれくらいか。
⇒（事務局）洪水浸水想定区域面積は氾濫ブロック全体の面積であり、L2 も L1 も実際には氾濫ブロック全域で氾濫しないため、各規模での値を出す場合にはこれよりも小さな値になる。
- ・ p5 グレー線の災害対応・追加整備は実施済みということによいか。
⇒（事務局）その通りである。
- ・ p5 菊川には下水処理場等、人工的な処理水が入り込む場所があるのか。令和 3 年に BOD が一時的に高いのは、農業用水が関係しているのか。
⇒（事務局）菊川に流入する下水処理水はなく、農業用水によるものが多い。BOD が高い要因は、河川流量が一時的に低下し、濃縮されたことが要因だと考えている。
- ・ 下小笠川下流で、整備計画策定時点よりも流下能力が低下している要因は何か。
⇒（事務局）土砂堆積によるものと思われる。現況の流下能力は整備計画流量を満足しているが、目標流下能力が下回る箇所が確認できれば、維持掘削で対応する予定である。
- ・ 上記に関連し、流下能力低下箇所の川幅はどうなっているか。川幅が広く、堆積しやすい箇所となっていないか。堆積しやすい箇所であると、一度掘削した後も継続的に掘削が必要となる。次期整備計画を検討する際は、河川全体でこれらの視点も踏まえて対策案を検討するとよい。
- ・ 本川の水位低下に伴い支川も水位が低下するが、支川の評価については、本川による効果に加え、支川単独で評価する方法もあるとよい。
- ・ 菊川は、川幅が狭いため、中小河川のように植生繁茂や土砂堆積の影響がすぐに出る河川である。そのような状況で、河道改修後にどのような管理を行うかが重要になる。整備後もモニタリングを行い、対策に役立てる必要がある。

- ⇒（事務局）下小笠川は横断工作物による堆積の影響も考えられる。河道改修では横断工作物の改築も実施する予定である。土砂が堆積しにくい河道計画は重要な課題であると認識しており、河床変動計算による安定性の確認など行っていく予定である。
- ・改修後に摩擦速度が15%以上増えると堆積しやすいというこれまでの知見がある。これを参考にするとよい。

4. その他

(1) 第11回菊川水系流域委員会での指摘事項とその対応

- ・意見なし。

(2) 河口フラッシュ調査

- ・現地観測に加え、既存データによる分析も重要である。既に既往データの整理を行っているが、ピーク流量より前に砂州がフラッシュされた可能性もあるため、衛星写真等を活用し、可能な限りフラッシュが発生した時点での流量を整理することが望ましい。
- ・河口砂州の発達要因の分析が重要である。冬季の季節風で砂が堆積する過程を考慮すると、春先の測量も実施したほうがよい。
- ・本川流下能力について、河口から3.5k付近まで流下能力が低下している。緩流河川の場合、土砂堆積により水位上昇すると、堆積区間より上流側で影響がでる可能性が高い。水位上昇すると掃流力が低下し、土砂堆積も促進することが想定され、治水上危険である。引き続き調査を実施し、堆積スピードや要因分析を検討していただきたい。
⇒（事務局）机上計算で河口砂州高が仮に50cm上がると5kpくらいまで水位上昇することを確認している。河口砂州による影響、状況把握は引き続き検討する必要があると考えている。
- ・かつて菊川では、砂州上に植生が発達することで、下流部の生物相（鳥や甲殻類）が豊かな状況になっていた。治水も重要であるが、豊かな生物相、植生等の視点も重要であると考えため、河口部のモニタリングでは、植生の記録も実施してもらおうと良い。
⇒（事務局）環境に配慮した対策も必要と考えており、植生の記録等のモニタリングは可能なため、今後検討していきたい。

(3) 流域治水プロジェクトについて

- ・水田貯留は積極的に実施してほしい。水田貯留は、営農者の理解と協力が必要で、社会貢献的な意味合いが強く、個人的なメリットがない。できるだけ営農者に協力してもらえるよう、関係者と協力してほしい。
⇒（事務局）営農者へのインセンティブも必要と考えており、補助金制度等を積極的に活用してもらえるように紹介していきたい。
- ・菊川流域は小さいので、水田貯留等の効果が見えやすい。どこに効果があり、恩恵を受けている地域かを明確化し、恩恵を受ける地域から負担金を分け合うなどの制度が作れるとよい。菊川からそのような取り組みが発信できればよい。
⇒（事務局）積極的に事務局でも協力を促すようにしていきたい。

- ・水田貯留の堰板はどのようになっているか。形状によっては、ピーク時には効果が出ない可能性もあると思う。
⇒（事務局）洪水ピークに効かせるため、今年度の実証実験では、堰板を改良したものや、オリフィス形状の排水柵で効果を確認する予定である。
- ・p.8 流域治水の具体的取組に関する指標は全国統一の表記なのか。
⇒（事務局）全国共通した表記で示している。ゼロであることは理解しており、今後各主体で積極的に取り組んでいながら数字をあげられるように進めていく。

5. 閉会

6. 出席者リスト

■委員：6名

氏名	専門分野	所属・役職	備考
秋山 信彦	関係漁業	東海大学 海洋学部 教授	
絹村 敏美	農業水利	静岡県土地改良事業団体連合会 専務理事	
渋澤 博幸	経済	豊橋技術科学大学 建築・都市システム学系 教授	
末次 忠司	水工水理学	(元) 山梨大学大学院 総合研究部 工学域土木環境工学系 教授	委員長
溝口 敦子	河川工学	名城大学 理工学部 教授	
山田 辰美	環境	常葉大学 名誉教授	副委員長

※道林委員（欠席）

■事務局（国土交通省浜松河川国道事務所）

氏名	所属・役職	備考
名久井 孝史	国土交通省 浜松河川国道事務所 事務所長	
黒田 英伸	国土交通省 浜松河川国道事務所 副所長	
田中 祐太	国土交通省 浜松河川国道事務所 調査課長	